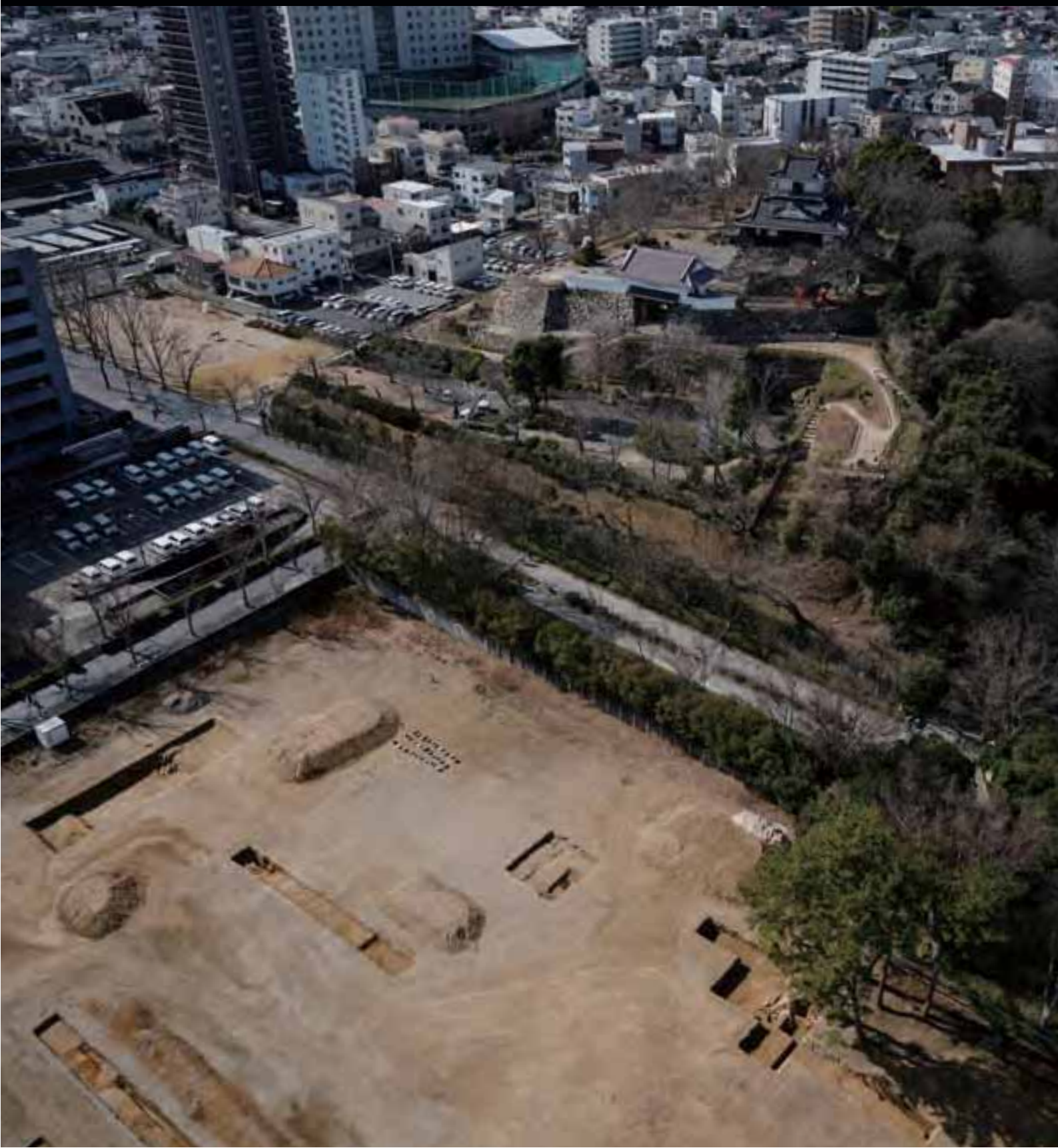
浜松城跡 35次調査の概要

2021年3月

浜松市教育委員会



１.浜松城跡の概要

立　地　浜松城跡は、現在の静岡県浜松市中区元城町を中心に展開する、戦国時代から江戸時代にかけて使用された平山城です。浜松市の中心市街地に位置し、JR浜松駅からは、北西へ約１kmの地点にあります。浜松城と城下町は、現在みられる中心市街地の基礎となっています。浜松城跡は、天竜川が形成した沖積平野を臨む三方原台地の東縁部に築城されています。浜松城の城域が最大の規模になった江戸時代には、東西600m、南北650mを測ります。最高所に築かれた天守曲輪から東側の平野部に向かって、本丸、二の丸、三の丸と階段状に主要な曲輪が配置される構造の城郭です。浜松城跡とその周辺の地形は、谷や湿地が入り組み、それらの自然地形を活かして浜松城が築城されました。

歴　史　浜松城が所在する静岡県西部地方には、戦国時代に使用された城郭が高密度に分布しています。これらの城郭群の中でも浜松城は天竜川平野に近接し、西遠江における経済や軍事拠点として重要視されました。徳川家康により元亀元年(1570)に築城されたのち、明治時代を迎えるまでの間、地域の拠点として整備・使用されました。浜松城の歴史は、大きく５段階に分けることができます。

第１段階は、浜松城の前身である引間城が整備された段階です。築城時の城主は不明ですが、16世紀前葉には、今川氏配下の飯尾氏が城主をつとめました。引間城は現在の浜松城公園の北東部にあたり、元城町東照宮とその周辺に名残を留めています。

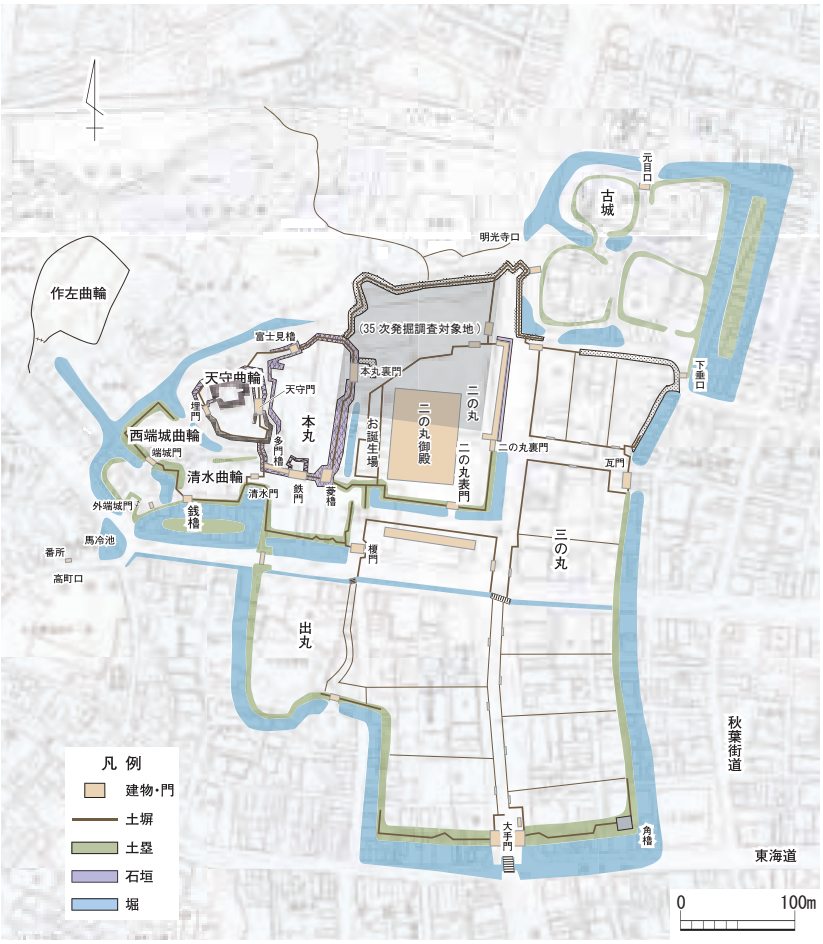
第２段階は、徳川家康が岡崎城から浜松城に拠点を移し、浜松城を整備した段階です。引間城は浜松城と改称され、武田信玄に対する前線基地として拡張、整備されました。城の整備に伴い、城下町の整備も行われ、浜松城と城下町の原形が整えられたと考えられます。

第３段階は、徳川家康の関東移封後、豊臣氏家臣の堀尾吉晴が入城し、天守台をはじめとした大規模な石垣や瓦葺建物を整備した段階です。現在みられる浜松城の景観はこの時期に形成されたと考えられます。

浜松城跡の位置と周辺の城跡

第４段階は、徳川譜代の大名が治めた段階です。江戸時代の浜松城主は目まぐるしく替わり、江戸時代を通じて10家22代を数えます。江戸時代前期のうちには、浜松城の主要な施設の整備が完了していたとみられます。なお、天守は絵図に描かれておらず、すでに失われていたと考えられます。改修を重ねながら、幕末に至るまで地域の拠点として使用されました。

第５段階は、浜松城が廃城になった明治時代以降です。廃城令が出された明治６年（1873）前後の時期に、浜松城の建物や土地は民間に払い下げられ、二の丸や三の丸のあった場所は開発が進みました。大規模な改変を免れた天守曲輪と本丸の一部を中心として、昭和25年(1950)に浜松城公園が開設され、昭和33年(1958)に復興天守建設、昭和34年(1959)には市史跡に指定されました。令和３年（2021）には、本丸の一部や西端城曲輪が追加指定されました。



浜松城跡復元図

浜松市博物館蔵「青山家御家中配列図」（17世紀後葉・調査区周辺拡大）

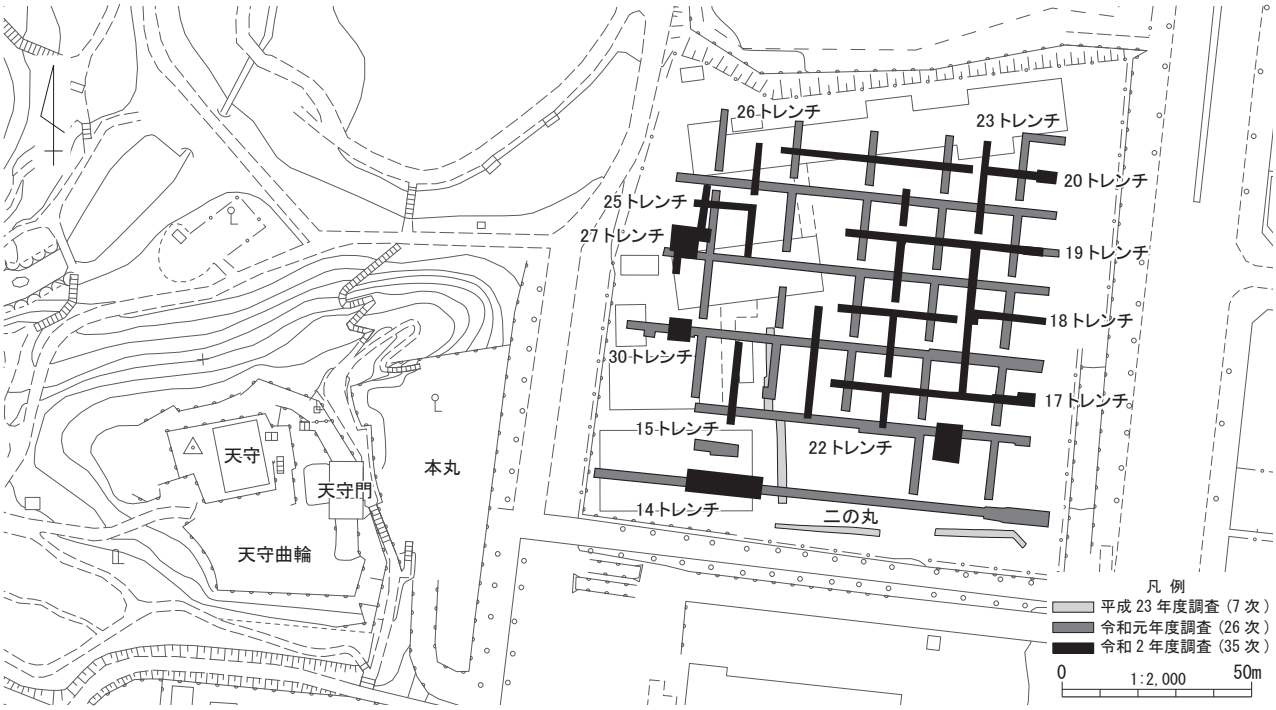
浜松城歴代城主と出土遺物

西暦	城　主	地域の支配者	関連出土品	おもなできごと
	飯尾賢連・乗連・連竜(引間城)	今川氏		1560（永禄三）年　桶狭間の戦い
1565			かわらけ（灯明皿）　瀬戸美濃天目茶碗	1565（永禄八）年　今川氏真、飯尾連竜を殺害
				1568（永禄十一）年　徳川家康、遠江に侵攻
1570				1570（元亀元）年　家康、浜松城築城開始
	徳川家康	徳川氏	かわらけ（灯明皿）　瀬戸美濃折皿	1572（元亀三）年　三方原の戦い、家康敗北
				1578（天正六）年　浜松城修築（天正九年まで）
1580				1579（天正七）年　築山殿と信康を殺害・秀忠誕生
	（城代）菅沼定政			1586（天正十四）年　家康、秀吉の臣下となる
1590				1590（天正十八）年　秀吉、家康に関東移封を命ず
	堀尾吉晴・忠氏	豊臣氏	堀尾期軒丸瓦　堀尾期軒平瓦	1598（慶長三）年　秀吉没する
1600				1600（慶長五）年　関ヶ原の戦い
1601				1601（慶長六）年　家康、東海道に伝馬制を制定
	松平忠頼			
1609				
	水野重仲			1616（元和二）年　家康没する
1619				1619（元和五）年　徳川頼宣、紀伊に移封される
	高力忠房		軒丸瓦	1620（元和六）年　幕府、諸大名に大坂城の修築を命ずる
1638				
	松平乗寿			
1644				
	太田資宗・資次		太田氏桔梗紋軒丸瓦	1655（明暦元）年　大風雨により、浜松城内に被害
				1675（延宝三）年　小天竜が彦助堤により締切り
1678				1680（延宝八）年　大風により、浜松城内に被害
	青山宗俊・忠雄 忠重		青山氏無字銭紋軒丸瓦	1691（元禄四）年　城内の屋敷で火災
1700				1700（元禄十三）年　城内の屋敷で火災
1702				
	本庄（松平） 資俊・資訓	徳川氏（将軍家）	本庄（松平）氏 繋九目結紋軒丸瓦	1706（宝永三）年　城内の屋敷で火災 1707（宝永四）年　宝永地震（二の丸御殿被災）
1729				
	松平信祝・信復			
1749			松平（本庄）氏 繋九目結紋軒丸瓦	
	松平（本庄） 資訓・資昌			
1758				
	井上正経・正定 正甫		井上氏井桁紋軒丸瓦	
1800				
1817				
	水野忠邦・忠精		水野氏沢瀉紋軒平瓦（縮尺不同）　沢瀉紋鬼瓦の破片	1822（文政五）年　鉄門東櫓を修理する
1845				
	井上正春・正直		井上氏井桁紋軒丸瓦	1854（安政元）年　安政地震（二の丸御殿被災） 1860（万延元）年　天竜川が決壊し、城下に被害
1868				1868（慶応四・明治元）年　戊辰戦争、明治と改元 1873（明治六）年　廃城令
				1945（昭和二十）年　浜松大空襲 1948（昭和二三）年　元城小学校二の丸跡地に復興 1950（昭和二五）年　浜松城公園開設 1958（昭和三三）年　復興天守建設 1959（昭和三四）年　天守曲輪・本丸一帯を市史跡指定 2014（平成二六）年　天守門復元 2017（平成二九）年　中部学園開設

２.調査の概要

調査地の概要　今回の調査対象地は、浜松城のうち、本丸・御誕生場（２代将軍徳川秀忠誕生伝承地）・二の丸にあたります。浜松城の廃城後は、住宅地や工場用地等に利用されました。昭和 23 年（1948）には、浜松市立元城小学校がこの地に移転開設され、平成 29 年（2017）まで所在していました。

調査の方法と経緯　今回の発掘調査は、浜松市都市整備部緑政課の依頼を受け、浜松市教育委員会（浜松市市民部文化財課が補助執行）が行いました。令和元年度の調査によって浜松城の構造を示す地形や建物跡、堀跡、瓦集積などを確認しました。令和２年度は、より詳細に内容を把握するため、幅２ｍの調査区（トレンチ）を令和元年度の調査区の間へ格子状に設定しました。また、本丸の構造や二の丸御殿の構造を把握するため、調査区の幅を広げ、面的な調査も行いました。検出遺構は、原則として平面検出に留めましたが、一部の小穴や堀跡などにおいては、規模や時期を確認するため、部分的に掘削を伴う調査を実施しました。

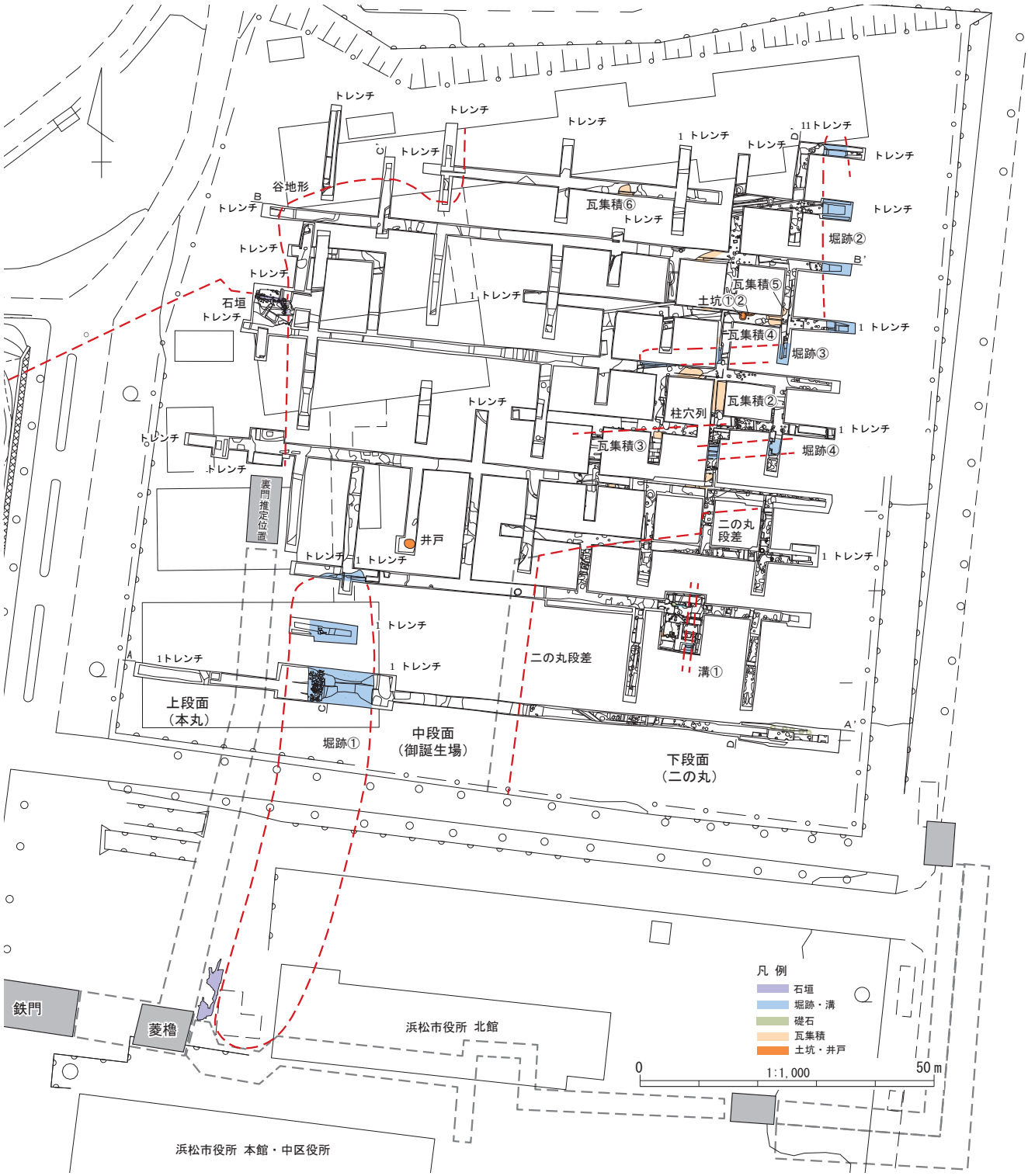


調査区配置図

令和元年度調査（26次）オルソ画像

令和２年度調査（35次）オルソ画像

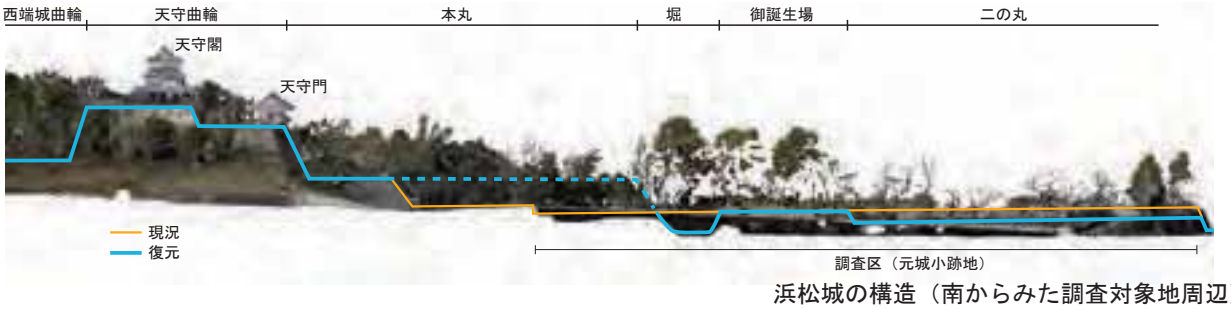
（1）令和元年度・２年度の調査成果



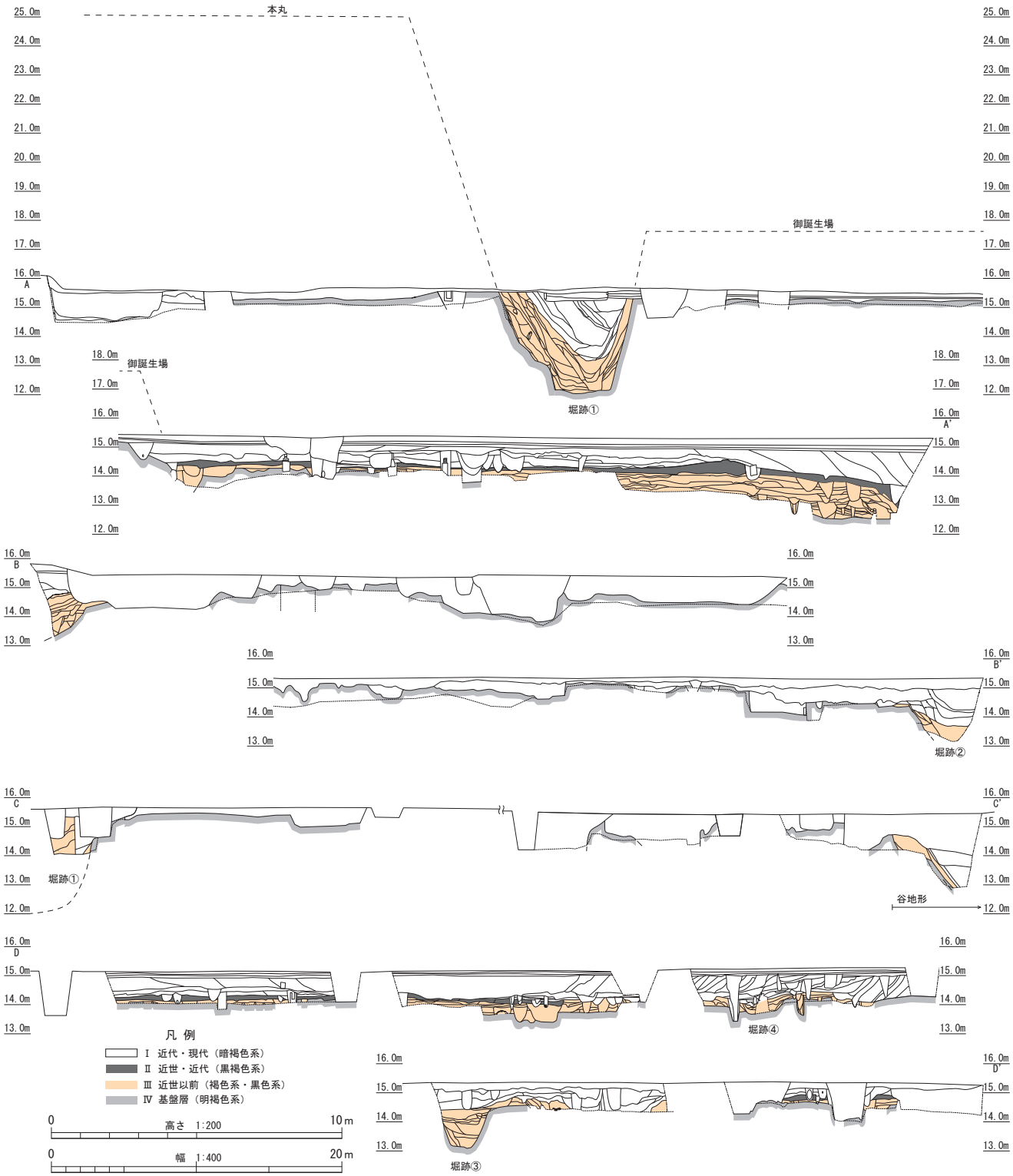
令和元年度・２年度検出遺構

検出遺構の概要　令和元年度および２年度の発掘調査によって、浜松城の本丸・御誕生場・二の丸の構造が徐々に明らかになってきました。本丸（上段面）は、東側の堀跡や北東部隅の石垣を検出し、本丸の規模が判明しました。御誕生場（中段面）と二の丸（下段面）では、境界部に 1.2m 程の段差が認められ、二の丸が一段低い場所にあったことがわかりました。二の丸では、戦国時代から江戸時代にかけての堀や柱穴、瓦集積などの遺構を検出しました。地層の帰属時期は、Ⅰ期：近代・現代、Ⅱ期：近世・近代、Ⅲ期：近世以前、Ⅳ期：基盤層の大きく４時期に分けることができます。遺構の埋没が浅い箇所では、地表面から 30 ㎝程で浜松城にかかわる遺構が認められます。江戸時代以前や廃城後の遺構や痕跡も多く、広範囲で確認できることから、調査区域が様々な土地利用の変遷を経ていることがうかがえます。

（２）調査区の土層堆積

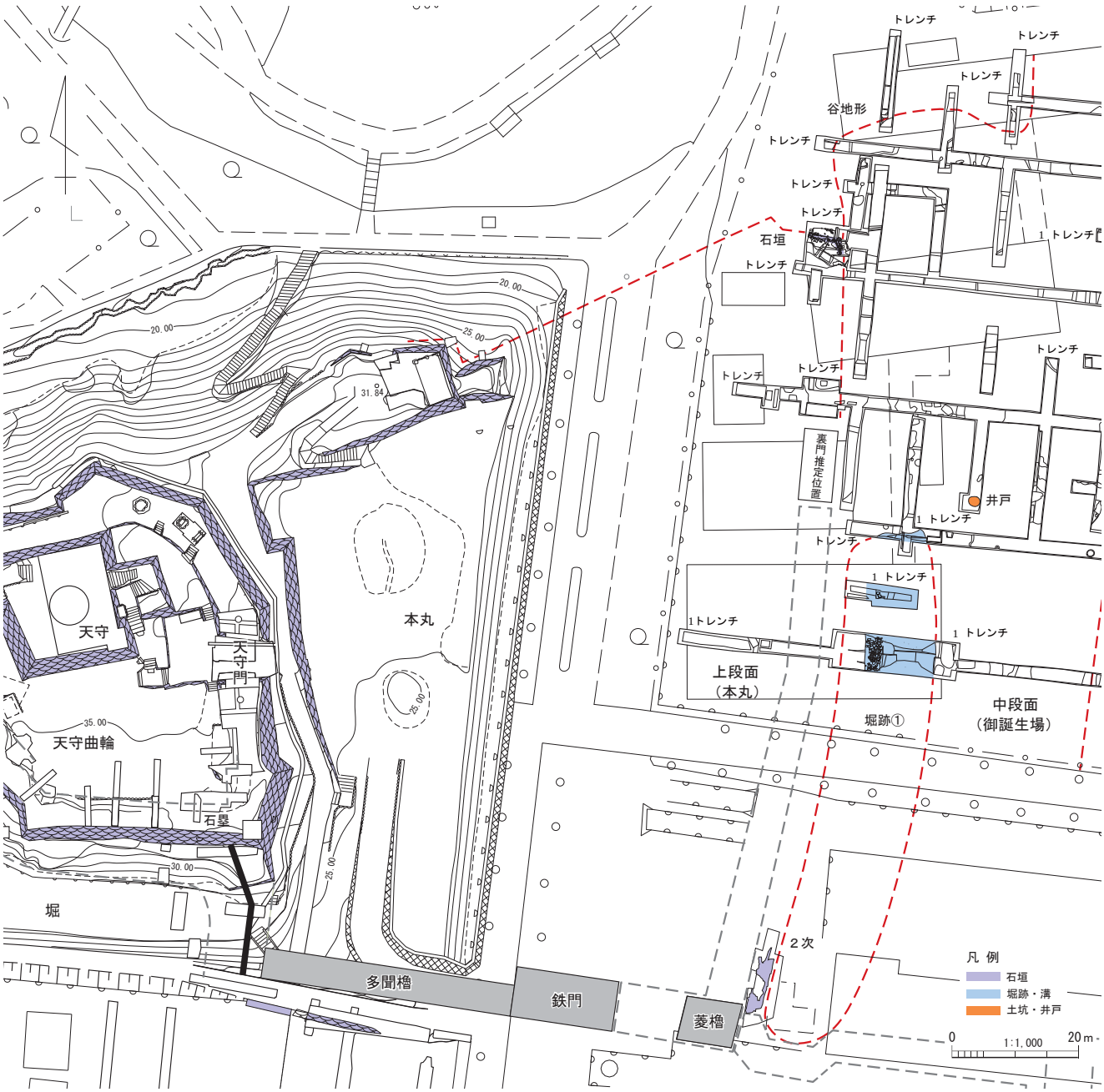


浜松城の構造（南からみた調査対象地周辺）



令和元年度・２年度主要土層断面

（3）本丸北東部の遺構



本丸北東部の検出遺構

本丸東側の堀と崩落石垣

本丸東側堀

本丸東側の堀を確認しました。堀は幅約10m、深さは検出面から約４mです。元城小学校跡地南端から約30mのところで堀が途切れていることを確認しました。江戸時代には、堀が途切れた部分の北側に本丸裏門があったと想定できます。また、堀の西岸には大量の石材が埋もれており、江戸時代の絵図に表現された通り、かつては石垣があったと考えられます。堀の埋土から出土する遺物は近代のものもあり、廃城後も一定期間は堀が残っていたことが明らかになりました。

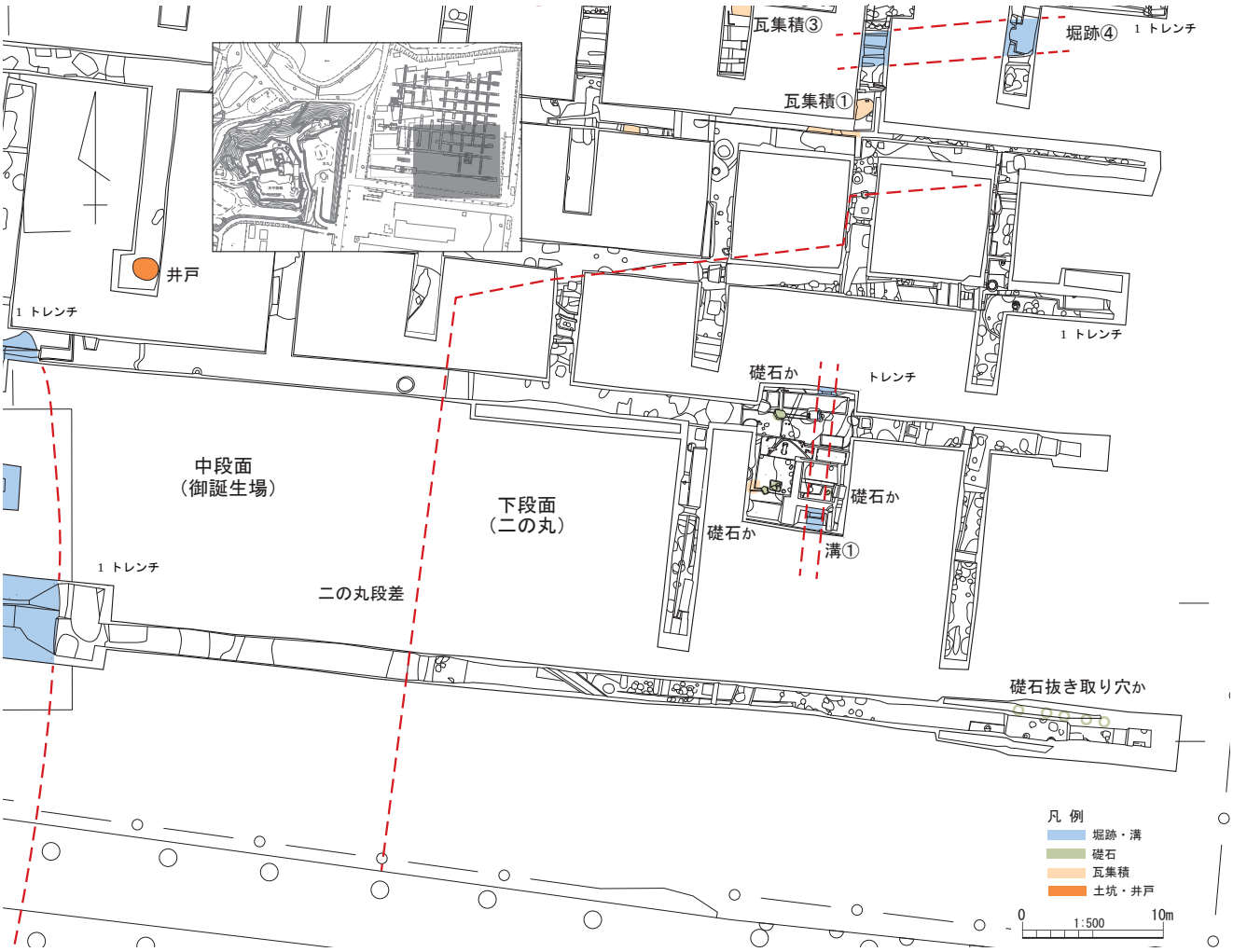
本丸北東部隅石垣

本丸北東部隅の石垣を確認しました。検出した石垣は、最大６段（高さ1.7m）が残存していました。石垣の築石には、主にチャートが用いられ、あまり加工せずに積み上げています。石材と石材の間には小型の円礫を詰めて平滑な石垣面に仕上げています。隅角部は、石材の長短を交互に積み上げる算木積みの技法がみられます。石垣の背面には、幅約１mの裏込めが確認できます。天守曲輪等の石垣と特徴が共通しており、堀尾氏が築いた石垣と捉えられます。

本丸北東部隅の石垣

本丸北東部隅石垣オルソ画像

（4）二の丸・御誕生場の遺構



二の丸・御誕生場の検出遺構

御誕生場と二の丸の境界にある段差

23トレンチ調査状況（礎石か）

御誕生場と二の丸の境界には、1.2m程の段差があります。調査区南端から南北方向に段差があり、17トレンチ北側で東に方向を変えていることを確認しました。上段が御誕生場、下段が二の丸にあたると想定されます。下段面の二の丸を囲うように段差がみられ、この段差の内側に二の丸御殿が存在したと考えられます。下段面では、礎石と考えられる大型の石材や、川原石を敷き詰めた敷石整地面を確認しました。

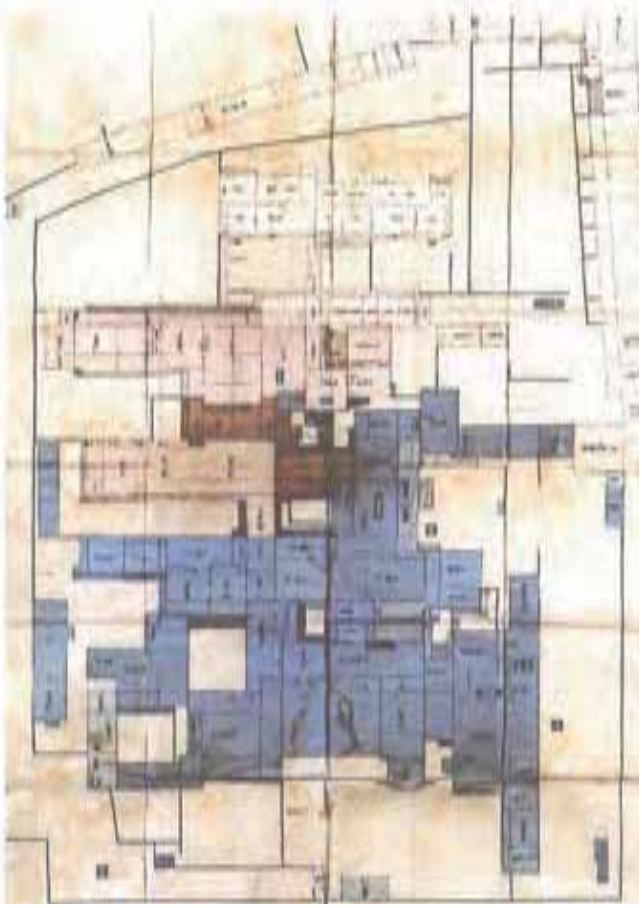
二の丸等の遺構

敷石整地面は、粘土層の上面に川原石を敷き詰めています。礎石と考えられる大型の石材と同じ時期のものと想定されます。また、二の丸では、江戸時代と戦国時代の遺構を確認し、大きく２時期に分かれることが明らかとなりました。戦国時代の遺構面と江戸時代の遺構面の間には、最大で１m程度の盛土がみられます。二の丸の整備にともない、安土桃山時代から江戸時代の初め頃に大規模な造成が行われたことがうかがえます。

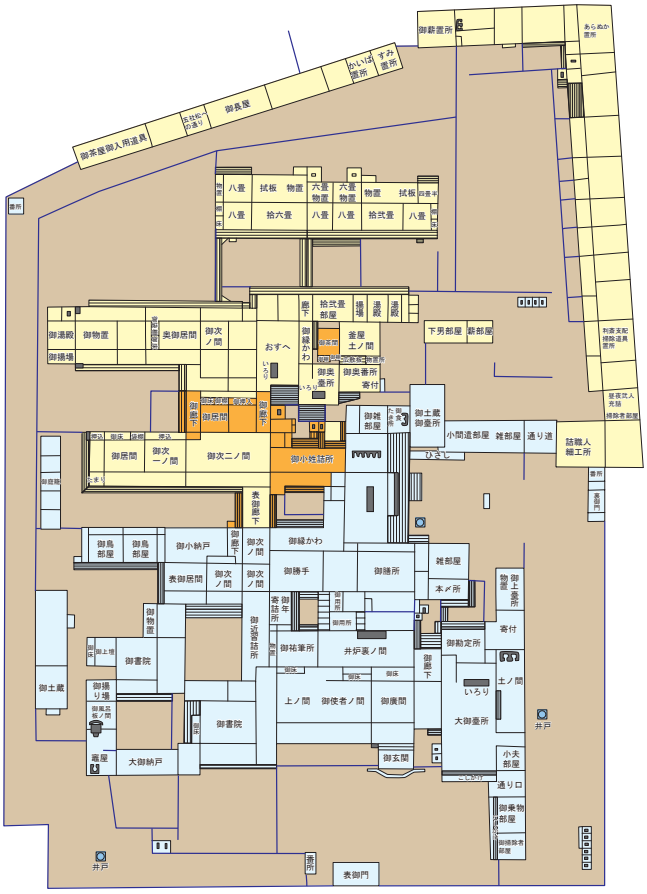
礎石と敷石整地面検出状況

埋められた戦国時代の溝①検出状況

江戸時代の遺構検出状況



浜松市博物館蔵　「浜松城二の丸絵図」



二の丸御殿の構造（「浜松城二の丸絵図」トレース）

（５）二の丸北東部の遺構と出土品

二の丸北東部では、堀跡や土坑、瓦集積などの遺構を検出しました。堀跡は３条検出し、２条は東西方向に並行し、もう１条は、２条と直交する形で配置されています。いずれも、本丸裏門や天守と並行もしくは直交しており、柱穴列とともに天守を意識した区画や建物配置となっていたことが想定されます。また、瓦集積も二の丸北東部で多く検出しています。瓦葺きの構造物が付近に存在したことが想定でき、瓦集積の位置から、建物や構造物の位置が推定できる可能性があります。二の丸北東部からの出土遺物としては、日用雑器の内耳鍋や、城主の家紋をあしらった鬼瓦などがあります。

二の丸北側の検出遺構

瓦集積

瓦集積は、15ヶ所確認しました。太田氏の家紋をあしらった桔梗紋軒丸瓦（17世紀中頃から後半）やそれ以前の瓦のみで構成された瓦集積と、本庄松平氏の家紋をあしらった繋九目結紋軒丸瓦（18世紀以降）や塀瓦、桟瓦を含む瓦集積の２種類がみられます。家紋瓦は、桔梗紋と繋九目結紋をあしらったものが多くみられます。太田氏や本庄松平氏が城主を務めた頃に、瓦の葺き替えを含む修繕等が多く行われたことがうかがえます。

瓦集積②出土状況

瓦集積③出土状況

瓦集積④出土状況

瓦集積⑥出土状況

瓦集積⑥出土鬼瓦（繋九目結紋）

瓦に残る痕跡　丸瓦の凹面には、瓦生産過程で粘土板を切り取る際につく痕跡（コビキ痕）を観察することができます。コビキ痕は、緩弧線が無数についた糸切り痕（コビキＡ）と、鉄線で切り取られるため、直線状の筋が痕跡として残るもの（コビキＢ）がみられます。これらは製作技法の変化によるものです。浜松城では17世紀初め頃に、糸切りから鉄線切りに変化したと考えられ、時期を知る手がかりとなります。

糸切り痕（コビキＡ）

鉄線切り痕（コビキＢ）

二の丸北側の堀と建物跡

二の丸北側では、堀跡や土坑、柱穴列などの遺構が確認されました。堀跡③や土坑①、②からは、江戸時代以前の遺物が出土し、瓦は含まれていないため、江戸時代までには埋められていたと考えられます。堀跡③、④は並行に本丸裏門や天守方向へまっすぐ延びています。柱穴列などからは、天守を意識して建物等が配置されていたことがうかがえます。本丸へ向かう大手通路などが想定されます。

堀跡③検出状況（11トレンチ）

堀跡③検出状況（23トレンチ）

堀跡の規模　堀跡③と堀跡④は、二の丸段差北側で東西方向に延びる堀跡です。２つの堀跡は、15mの間隔で並行しています。遺構の規模は、堀跡③が幅2.5m、深さは検出面から１m、堀跡④は、幅2.5m、深さは検出面から0.4mです。いずれの堀跡も、堀底を平らに仕上げた箱堀です。

柱穴列

土坑①・②検出状況

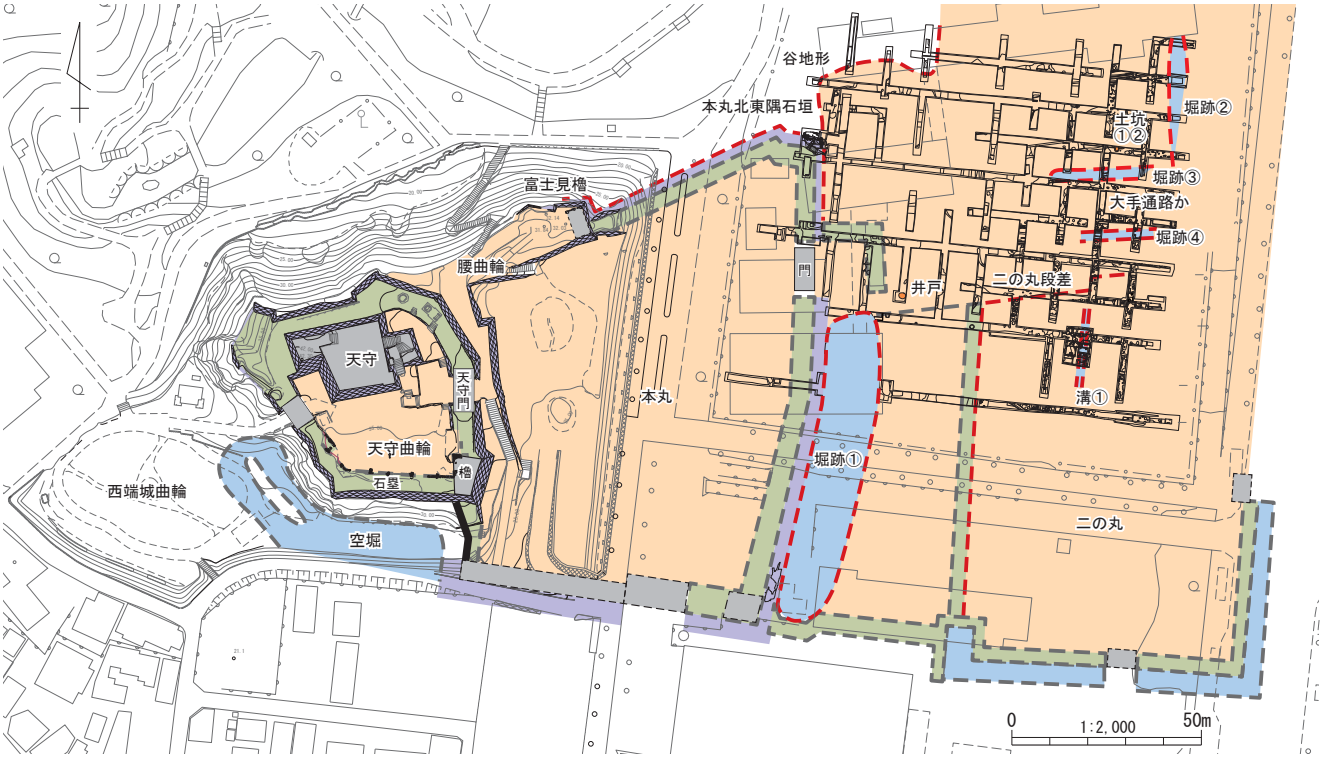
土坑①出土内耳鍋

柱穴列と土坑　柱穴列は、堀跡③と④の間に、堀跡と並行する方向で検出しました。径0.45～0.6mの柱穴が、1.7～1.9m間隔で並んでいます。出土遺物がないため、遺構の時期ははっきりしませんが、二の丸御殿および関連する建物の柱穴の可能性が考えられます。また、柱穴列の南側にも柱穴が確認できるため、もう１列存在する可能性があります。

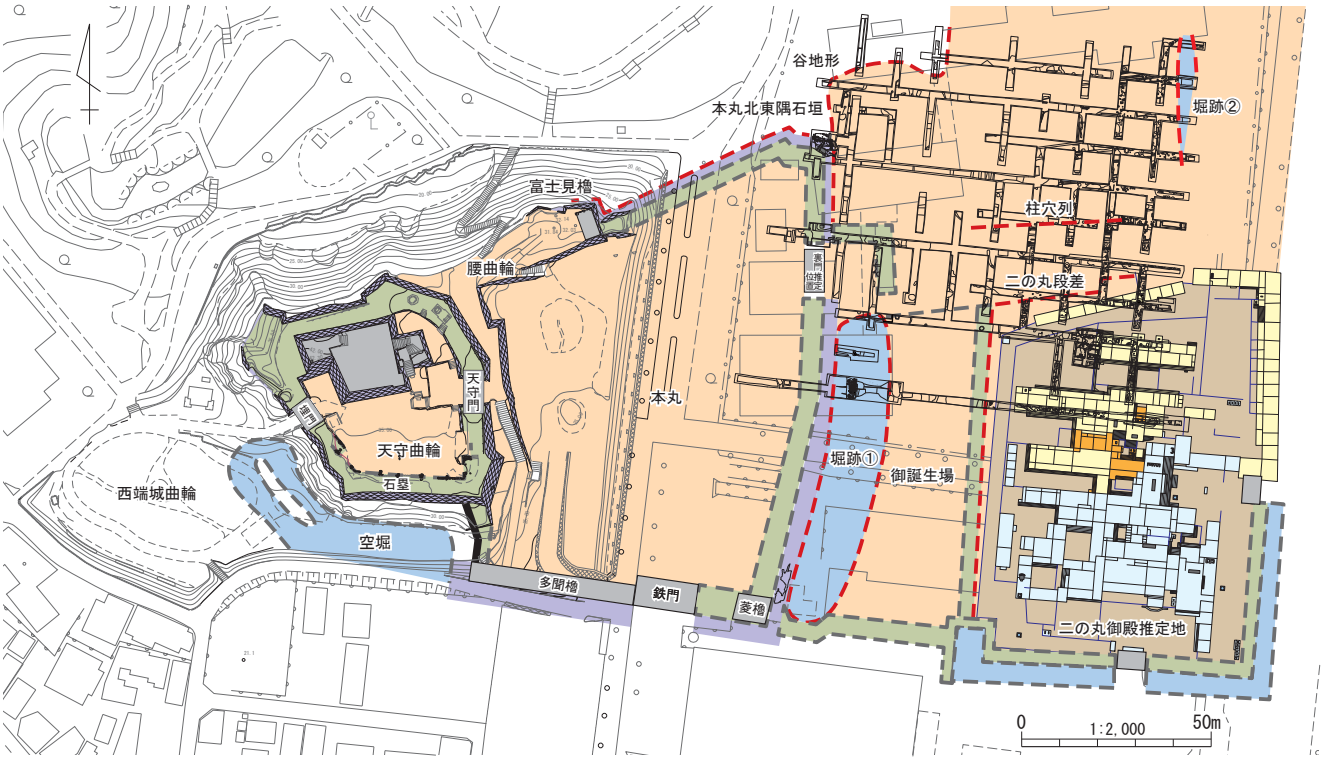
土坑の規模は、土坑①が、径1.3m、深さ0.1mの長楕円形、土坑②は、径1.7m、深さ0.4mです。土坑①と②は切り合っており、土坑②の方が土坑①の後に掘られています。

３.課題と展望

調査対象地での２年間の調査により、浜松城本丸・御誕生場・二の丸およびその周辺施設のより詳細な構造が明らかとなってきました。検出した遺構は、戦国時代～安土桃山時代と江戸時代、明治時代の３時期があります。特に二の丸では、戦国時代から江戸時代の間に、戦国時代以前の遺構を埋め、新たな整地面が形成されるなど大規模な造成を行っていることが明らかになりました。また、本丸東側の範囲や構造が徐々に判明してきており、より詳細な本丸の構造把握が期待されます。今後は、二の丸御殿やその周辺の建造物について、発掘調査の蓄積と、絵図などを用いた総合的な検討を行い、より詳細な浜松城の姿を明らかにしていきます。



安土桃山時代（堀尾氏在城期）を中心とした時代の遺構（一部、戦国時代を含む）



江戸時代の遺構　※御殿などの建物の位置は推定

報 告 書 抄 録

書名（ふりがな）	浜松城跡35次調査の概要　（はままつじょうあと35じちょうさのがいよう）
編著者名	和田達也・坂下俊介（編）・長谷川敦章
編集機関	浜松市市民部文化財課（浜松市教育委員会の補助執行機関） 〒430-8652　浜松市中区元城町103-2 TEL（053）457-2466
発行機関	浜松市教育委員会
発行年月日	2021年3月19日

遺跡名（ふりがな）	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
浜松城跡（はままつじょうあと）	静岡県 浜松市 中区 元城町	22131	01-04-14	34度 42分 45秒	137度 43分 30秒	2020年6月1日 ～ 2021年3月19日	1,500㎡	確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
浜松城跡	城跡	戦国時代 安土桃山時代 江戸時代	石垣 堀跡 瓦集積 礎石	瓦 陶磁器 土師質土器	本丸北東部隅の石垣構造を確認。本丸東側堀跡の規模と構造を確認。二の丸御殿推定地付近で礎石や敷石整地面などを確認。

要約	平成29年（2017）までこの地に所在していた元城小学校の統廃合にともない、浜松城跡の本丸、御誕生場、二の丸部分にあたる当該地の確認調査を行いました。令和２年度は調査２年目にあたり、令和元年度に引き続き多くの調査成果を得ることができました。本丸にあたる箇所では、本丸東側の堀跡を検出し、幅約10m、深さ約４m(地表面から)の規模であることが判明しました。また、本丸北東部隅の石垣を検出しました。これらにより本丸の規模が判明しました。二の丸にあたる箇所では、礎石と考えられる石材や、川原石を敷き詰めた整地面など二の丸御殿やその周辺施設の構造にかかわる遺構を検出しました。また、戦国時代以前の遺構が造成により埋められている状況を確認し、近世には大規模な造成が行われていることが明らかになりました。

浜松城跡　　次調査の概要

１年　月１　日

発　　行　浜松市教育委員会

編集　浜松市市民部文化財課
（教育委員会の補助執行機関）
〒430-8652　浜松市中区元城町103-2

印　　刷　中部印刷株式会社